

---

# 時空を超えて～ぬら孫世界奮闘記～

将軍

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

時空を超えて〜ぬら孫世界奮闘記〜

### 【Nコード】

N7706V

### 【作者名】

將軍

### 【あらすじ】

ごく平凡な中学1年生の主人公は、新学期初日に両親を妖怪に殺され自らも殺されそうになるが突如光に包まれ気がつけば妖怪が実在する世界であるぬらりひよんの孫の世界に半妖として転移してしまふ……………

## 新学期初日、ブラッドルーム

その日は朝から曇り空だった。

何か嫌な曇り空で不吉な予感を抱かせる天気だった。

だが、そこからとある少年の身の起きた出来事を予測するのはスーパーコンピューターをもつてしても不可能だろう。

なにしろ化け物に両親を殺されたのだから。

「嘘……だろ……」

「嘘？　何が嘘だと言っただけ？　今お前の目の前に広がっているのは間違いなく現実だぞ？」

先ほどまで目の前にいた犯罪者は今は人の姿をしていなかった。その姿はもはや獣。

犯罪者というより犯罪獣である。

目の前にいる殺人犯……いや殺人獣は返り血で染まった口元を歪めて笑いながら少年に視線を向ける。

体は一応人間だ。筋肉質な両腕やがっちりとした体つきから推測して、おそらく服を脱げばボディービルダーのように全身に筋肉がついているだろう。

それだけならただの筋肉男なのだが、目の前の男には一つ明らかに

人ではないことを示す証拠がある。

これ以上ないくらいに一瞬で分かる証拠。それは顔だ。

目の前の男の顔は熊だったのだ。それもただの熊ではない。本来熊にはないはずのツノが小さいながらも頭から2本生えている。

「この世界は最高だ……妖の気配が存在しないのだからな。いや、人が妖を消したのか？まあ良い、どの道この世界は儂の天下だ」

少年は目の前の化け物が言っていることの半分も理解できていなかった。

妖と言う言葉はもちろん、『この世界』が意味することも理解できていない。

ただ分かってきたのは、目の前の血だまりもそこに倒れ伏し絶命している両親も、そのすべてが現実リアルだということ。

そして、次に殺される者がいるとすればそれは自分だということだ。

「う……あああああああ！」

絶叫し尻もちをつく少年を相変わらず口元に笑いを浮かべながら見つめていた。

「やはり面白いな……絶望にのまれる人間を見るのは本当に面白い。だが、そろそろ飽きてきたわ」

化け物は血だまりに転がっている少年の両親の体を両腕でむんずと掴み上げた。

「見ている餓鬼。今貴様の目の前でお前の母親が本当の意味で『死ぬ』ところを見せてやる。」

少年は化け物がやろうとしていることは分らない。だが、両親の死体に化け物がなにかをしようとしていることはかるうじて理解できた。

「やめ……！」

少年が言葉を言い終えるより早く化け物は両手に持った両親の頭を素手で握りつぶした。

肉がつぶれる音と骨が砕ける音が部屋中に響き渡り、少年の心に絶望と言う感情を刻んでいく。

「いいぞその表情……絶望に吞まれていくその顔を見るのは本当に面白い！」

げらげらと笑う化け物を少年は見えていられなかった。

必死の思いで体を動かしたドアの方に向かう。外に出て誰かに助けを……そんな願いは簡単に打ち砕かれた。

ほぼ一瞬で少年に追いついた化けものが少年の体を殴りつけ、その体を砲弾のように吹き飛ばしドアごと外に飛び出させたからだ。

もはや息も絶え絶えの少年の体を化け物は片手で掴み上げる。

持ち上げられた少年は霞みつつある両目を必死に開いて、両親を殺

した目の前の化け物を睨みつけた。

この時点での少年の心から恐怖は消えていた変りに体を支配していたのは怒り。

だが、怒りで体を満たしていても少年には目の前の化け物を倒す力などない。

「その瞳…… 儂を憎んでいるのか？ 瀕死の状態で大した気力じやな…… だがその怒りを貴様は儂にぶつけることさえできずに死ぬのだ」

少年を掴み上げたまま怪物は姿を変えていく。

全長が4メートルはあろうかという大熊へと。

その額にわずかに生えていた2本の角は瞬く間に太く長いものとなる。

「冥土の土産に儂の名を覚えてやろう。儂の名は大妖怪『鬼熊』。よく覚えておけ」

そう名乗った鬼熊に対して少年は震える唇で必死に言葉を紡いだ。

「…… 僕…… の名前は…… 厩戸義人…… ここで死ん……  
でも…… 霊となって…… お前を殺してやる！」

義信の言葉に妖怪鬼熊は苦笑を浮かべたように見えた。

「貴様程度では例え霊となっても、この儂を殺すことはできん。愚

かな夢を描きながらここで骸の世界に旅立つが良い！」

鬼熊の右手が義信の頭を潰そうと力を込めかける、義人の意志はその事実を認識したのと同時にまばゆい光のなかに消えていった。

意識を手放す直前の視界に映ったのはなぜか苦悶の表情を浮かべ、雄叫びを上げる鬼熊の姿だった。

その日その時、1人の少年の存在が一つの世界から消え去った。

## 新学期初日「ブラッドルーム」(後書き)

今回、2次作品としてぬらりひよんの孫をやらせてもらいますが、  
私自身はぬら孫2次作品に取り組むのは初めてですのでなにかと不  
満を覚える面もあるとは思いますが優しく見守ってください

## 落下先〜ゴーストワールド〜

一体どれほど意識を失っていただろうか、ふと義人は目を覚ました。なにやら重い頭を振りながら体を起こした義人は周りの風景に首を傾げた。

「ここ、どこだ？」

義人の周りにひろがるのは無数の大木で構成される原生林と地に僅かに積もっている雪だった。

「なんでこんなところに．．．．．僕は確か、家で化け物に殺されかけて．．．．．！」

すこし霞がかかったようななっていた頭が鮮明になり全ての出来事が思い出されてきた義人は慌ててあの時自分を殺そうとした『鬼熊』を探すが、近くには姿は見えない。

「良かった．．．．．」心の底から安堵した義人だったが、起こったことが鮮明に思い出されたことで思い出したくもないことまですぐ理解できてしまった。つまり両親の死である。

「母さん．．．．．父さん．．．．．く．．．．．何でだよ！」

湧き上がる衝動を抑えられず涙を両目から流す義人。

一旦流れ出した涙は抑えることは出来ず、それでも最低限の自己防衛本能が働いている為か声を押し殺して泣く義人。

そんな状況だった為、大木の枝からこちらを眺める視線に義人は気づくことができなかった。

「こんな所に人間がおるや」

「本当じゃ、わざわざシマに入ってくるとは物好きな人間じゃ」

急に周りから聞こえてきた声に顔を上げる義人が見たのは何時の間にか自分を囲む異形の者たち。

「え？……………」

「しかも、見たこともない服装じゃ。貴様、都のものか？」

自分の周りを囲む異形の者たち、あの時家で家族を殺したヤツと同じ化け物たち……………」  
『妖怪』。

「あなた達は……………妖怪ですか？」

「ヨウカイ？ 最近の者はそう呼ぶのか？ 儂らは妖じゃ」

「妖……………」

黙ってしまった義人を見て、彼を囲む群れの中から一人の巨漢が出てきた。

その姿を見て、義人は思わず呟いた。

「顔が2つ!?」

「やはり、人間にはおかしく見えるようだな」

「そりゃあ我ら妖と人間では違うぜ兄貴」

2つの顔がそれぞれ喋るその姿に釘づけになる義人。

「こいつの体から微妙な妖気を感じるが……弟よ、これは誰のものだ？」

「兄貴、確かに微かだがこの妖気は間違いない。『鬼熊』の奴のものだ。京に向ったあの馬鹿のものだぜ」

2つの顔をもつ巨漢は、義人の前でどかっと腰を降ろした。

「俺たちの名は両面宿儺。宿儺組の大将をしている。少年、質問に答えろ」

「お前はどこで鬼熊と会った？　そして会ったとしてどうやって生きのこったんだあ？」

両面宿儺の2つの顔が喋る様に動揺しながらも義人はなんとか口を動かし言葉を紡ぐ。

「家に帰ったら……母さんと父さんが巨漢の男に殺されて血溜まりの中に倒れていて……振り向いたそいつの顔がとつぜん熊になって……僕も殺されそうになった時、光に周りにが照らされて……そこからも覚えてない」

「光のことは解せないが、大体のことは分かった」

「しかし、貴様の親は都者というのに奴の変装を見破れんかったのか？ 余程無能な人間とみえる」

両面宿儺の後ろ顔の言葉に義人の中の何かが動いた。

「確かに、奴は組の中でも力しか能のないでくのぼうだったからな。そんな奴に呆気無く殺されるといふのはやはり人間か……抵抗も出来ず殺されるとは、所詮力なきクスか」

「違う……」

「ん？」

「違う！」

義人は両面宿儺を正面から見据えた。

「父さんと母さんは無能でもクスでもない！ 化けもののお前たちが僕の両親を侮辱するな！」

心の底から湧き出す激情のままに、叫んだ義人は直前に周りの変化に気づいた。

自分を囲んでいた大小様々な両面をもつ妖怪たち。その大半が地面に倒れ伏せていた。

目の前にたつ両面宿儺も、その顔色（とは言っても片側だけしか

見られないが)も変わっている。

「この妖気．．．．．今まで隠していたのか？貴様どこの者だ！」

「僕は人間だ！」

「たわけたこと抜かすなこの餓鬼が！ 人にこれ程の妖気を出せるものなどおらんわ！ 大体人だというならその腕はなんだ！」

宿儺に指摘されて自分の両手を見る義人。義人の両手は、先程まで肌色の皮だったはずの腕は鱗に覆われた爬虫類のような腕へと変わっていた。

「!？ どうして．．．．．」

啞然となる義人の喉元に刀が添えられた。

「!！」

慌てる義人に向けて4本ある腕の一つに握った刀で義人の首元に当たっている宿儺は、残りの3本の腕で肩に背おっていた巨大な斧を構える。

「お前がなに者かは分からんが．．．．．人などという妄言を吐き続けるようならここで死んでもらうしかない」

「どの道部下どもを多少とはいえ骸にした貴様を殺さない理由はないけどな！ あの世に行ければ無能な親を叱りつけてこい！ 『無能め！』とな」

「僕の母さんと父さんは無能じゃない！」

「「ほざけ若造！」」

義人の言葉を打ち消すように、声と共に巨大な斧を振り下ろそうと振り上げる宿儺。義人は自らの最後をこんどこそ覚悟した。

「大の大人が寄ってたかって子供1人を襲うのは醜いものね。宿儺組の名が泣くわ」

突然響いたアニメ声？（義人の感覚では）にその場にいた全ての者の動きが止まる。そして次にはその声が発せられた方に視線が向く。

そこにいたのは外見が11〜12歳ほどの長髪の美少女だった。

背は義人と同じくらいで、美しい花の絵柄が織り込まれた和服を来ている。

その柄の花の名は椿。

「誰だ、貴様は？」

「私の名は古椿。私はそいつに興味をもったの。そいつは私が貰って行くわ」

「古椿？……花霊組の女君か！ その行為が宿儺組との対立を意味するのを分かっているのか！」

「ええ、もちろん」

ニコつと笑った古椿は、次の瞬間その場の宿雛組構成員全員を明確に敵に回す言葉を吐いた。

「あんた達くらいなら、私1人で十分よ」

「「ぶち殺す！」」

宿雛組の生き残りの妖怪たちがいつきに古椿に襲いかかった。

だが古椿に焦りの色はなかった。

「針虫の舞！」

古椿の声に応えるかのように森のあちこちから蜂が集まってきた。

その数は数えきれない。

その集まった蜂たちは、次々に迫ってくる妖怪たちに突撃していく。

妖怪である彼らにとって本来ならただの蜂如き、敵ではないはずなのだが………？　？　？

「なんだ、これは！」

「体が……体が痺れる！」

蜂が持つ妖怪にも効くらしい毒によって宿雛組の妖たちは次々に行動不能に陥っていた。

その光景にただただ呆然としていた義人は自分の前にさした影に顔を上げた。

そこにいたのは、先程現れた少女。古椿。

「あんた大丈夫？ 動ける？」

「うん．．．大丈夫．．．だけど」

「ん？」

「君も妖怪．．．．．なんだろ？ なんで僕を？ あいつらは信じ  
てくれないけど僕は．．．．．」

「知ってるわ。人間なんでしょ。でも助ける理由は後で話すわ。今  
は私を信じて。ここから脱出するわよ」

古椿に手を引かれて立ち上がった義人は、目の前にたつ少女を見つ  
めた。

まさしく美少女という表現がぴったりと合う古椿の瞳は黒く澄んで  
いて、一切の濁りもない。

「分かった。とりあえずついていく」

そう言って、動こうとした義人は見てしまった。

4本の腕で斧を持ち、真上から古椿に向けて振り下ろそうとしてい  
る両面宿儺を。

「危ない！」

思わず叫んでしまった義人に古椿は、頷きを返した。

「分かってるわ！」

次の瞬間起きたことはもはやギャグでしかなかった。

「妖器、<sup>ツバキ</sup>海石榴の椎！」

古椿の手に握られた木製の木槌。側面に椿の絵柄が描かれているその鎚が横薙ぎに振られ、今まさに斧を振り下ろしかけていた両面宿儺を文字通り山の向こう側まで吹き飛ばしたのだ。

「うそ？」

古椿の手に握られている木槌はそれほど大きい訳ではない。あくまでも女の子でも握れるほどの大きさでしかない。

それをあの一撃で、あの一振りで山の彼方まで吹き飛ばすというのは人間離れしている。

「（人間そっくりでも……彼女もやっぱり妖怪なんだ……）」

「さて、他の部下たちもおおよそ麻痺させたし。大将やられた以上そうそう後は追えないはずよ。行くわよ。私の手を握って」

促されて手を義人が握った直後、古椿は義人の手を握っている重さを感じさせない軽やかな動きで飛び上がり巨木の枝に飛びのったかと思うと次から次へと枝をジャンプしていく。

「どこにいくの？」

体に襲いかかる揺れに翻弄されながら尋ねる義人に古椿は即座に答えた。

「私が大将を務める組。花霊組の屋敷よ」

落下先〜ゴーストワールド〜（後書き）

この回で主人公は自らを殺そうとした妖怪の仲間『両面宿儺』と自分を助けようとする妖怪『古椿』と出会います。

ここから話が大きく動きだしていくわけですが、まだ謎は多く残っています。

義人を包んだ謎の光とは？ なぜ古椿は義人を助けたのか？ 等々ありますがそれらはこれからの話で明かしていきます。

時に、妖怪って探し出すのは簡単ですが、女妖怪でこれだっ！と思える奴を探すのは一苦労です（ - ; ）

## 花霊組

「ここが花霊組の屋敷よ」

「ここが？ 妖怪が住んでいるようには思えないんだけど。妖怪つてもっとボロボロの家に住んだりするものじゃないの？」

「人と妖怪の違いはあっても、暮らしたい場所の感覚はそう違わないわ。君だつて汚い場所よりはこちらの方が良いでしょう？」

「まあ確かにそうだけど……」

義人が古椿に連れられて来たのは、山を降りた小さな里に建つ大きな屋敷だつた。

妖怪の本拠地というからには山奥の秘密の隠れ家かどこかと思つていた義人からすれば意外というか期待はずれというか妙に肩透かしされたような気になつていたのだ。

「とりあえず上がつて？ 今組の者はみな出払っているから遠慮はいらないわ」

「あ、ありがとう」

おっかなびつくり屋敷の居間に上がる義人の姿に古椿はクスクスと笑つた。

「畏とかなんてないわよ。大体、あなたを殺すつもりならわざわざあの場所から本拠地に連れてきたりしないわ。そうビクビクしない

でお茶でも飲みなさいよ。そこに出してあるから」

古椿が差し出した湯飲みを受け取りお茶を啜りながら義人はふと思つた疑問を口に出した。

「あのさ．．．．人里の屋敷を妖怪が本拠地にするのって珍しいんじゃない？」

「別に珍しいわけじゃあないわ。最近噂の関東の新興組織の奴良組も人間の街に屋敷を構えてるという話だし」

奴良組という言葉に義人は思わず口に含みかけていたお茶を吹き出してしまった。

「大丈夫？ いったいどうしたの？」

「ゲホゲホゲホ！ 今奴良組って言った？」

「ええ言ったけど．．．．それがどうしたの？」

「いや、あの、その．．．．．すごく有名な組だから、意外だなと思つて」

「そう？ まあ確かにあなたはよそ者みただし人というなら意外かもね」

義人はその言葉に頷きつつ、先程の古椿の言ったことについて考えていた？

古椿が言つた奴良組という言葉に義人はよく知っていた。

その名も、歴史も、関係する事件も、おおまかな事は全て知っていた。

だがそれらは、作品の中での出来事だ。

義人も愛読していた『ぬらりひよんの孫』という漫画の中の出来事なのだ。

それらはあくまでも仮想の物語であって現実ではなかったはずなのだ。

もし、その仮想世界の名が出てくるとしたら、今自分が生きるこの世界は現実世界とは言えない。

もしその世界に名をつけるとしたら1つしかない。つまり『ぬら孫の世界』である。

「まさか僕は……元いた世界から別の異次元に移動したのか？　だがそうだと何でなんだ？　いったいどうしてこの世界に？」

「ところで、あんたはなんて名前なの？」

「僕の名前は義人。既戸義人」

「私の名前は、宿儺組の奴らが話したから知ってるだろうけど古椿名前の通り椿の精霊よ。時になんか悩んでるみたいだけど、どうしたの？　私があなただけを助けたわけが気になる？」

「いや、その……色々と……」

「私があなただを助けたのはね……あなたがこの世界の者じゃないと思っただからよ」

義人はもう一度、口に含んだお茶を吹き出しそうになった。

「その反応を見るに、本当みたいね」

「いやいやいやいやちよつと待つて！　なんでそう思っの？」

「宿儺組の奴らに両親を侮辱された時、あんた妖気を……. 畏を放ったでしょう？　それも下手な下つ端妖怪なら即死するくらいのもを。そしてその後、あんたは自分の変化に気づいたはずよ」

自分の変化、思い当たることはただ1つ、自らの腕が爬虫類の腕を鱗が覆ったような状態になっていたことだ。

「実は私たち花霊組は、この辺り一体の精霊界と人間世界の境界線を守る役目も負っているのね。名前からも分かるとおり私たちの組の大半はなんらかの花の精霊だから」

「（花？……. そうか、考えてみればという奴良組が新興組織と言われる時点で作品世界の歴史で言えば戦国時代のころ……. カレーなんてある時代じゃないか……. おかしいと思っただよ）」

などとくだらないことを考えている義人だがいくら妖怪とは言え古椿はそんな事には気づけない。

もつとも気づかれたら、哀れな両面宿儺と同じように木槌で吹き飛ばされたろうから幸いと言えるだろう。

「それで今日も何人かの部下たちが見張りについていたのだけど、そいつらから『穴』が空いたとの知らせが入ったの。」

「穴ってなに？」

「世界にぼつかりできる穴。世界と世界を繋ぐものよ。もちろん精霊界と人間界を繋ぐのも、穴よ。だから別に穴自体は珍しくない。でも、あの時は……。」

「あの時？」

「あんたが落ちてきたときよ。眩い光と共に。」

「僕はそもそもそこから落ちてきたの？」

「ええ、私たちが見てる前で凄まじい速度で。私には光がまっすぐ地面にぶつかったように見えただけ。」

義人の脳裏に一瞬、大気圏に再突入し輝く自分の姿が浮かんだがすぐに首を振ってそれを打ち消した。どうやら疲れきっている自分の脳が息抜きを求めているらしい。

「あなたが穴から落ちてきたことは、あなたが別世界から落ちてきたことを意味してる。精霊界でもなく人間界でもない……。」  
「言うならば3つ目の世界から。」

古椿は義人の抱える秘密を除きこむように義人の目を見つめた。

「あなたはどこから来たの？」

義人は即答できなかった。先程、ぬら孫の世界かもしれないという予想は立てた。だがそれはもしかしたら？という仮定の話でしかない。

それに、もしこの世界が本当にぬら孫の世界だったとしてここで自分が妖怪が存在していない、なおかつ漫画の中でこの世界が描かれている場所から来たなどと話せるだろうか？それを明かしてしまえばこの世界を少なからず変えてしまうことにもなりかねないのではないか？そう義人は考えてしまう。

「ねえ、どうなのよ？」

古椿の促す声に義人は決断を迫られる。

神は非情だ。両親を殺され絶望を味わった少年に休みなく次の試練をぶつけてくる。

「僕は……………」

少年の口が言葉を紡ぐ。

「僕は……………」

少年の口が真実を紡ぐのを全く古椿。

どちらを選ぶかの決断を話そうとする義人。

2人の意思が1つになろうとした、その時だった。

「女君様！ 早くお逃げください！」

突然居間の襖を開けて入ってきたのは、ピンク色で桜柄の和服を着た少女。こちらもまた美人であり絵柄から考えるに桜の精霊か何かなのだろう。

「なにがあつたの!？」

「中部豪熊会の奇襲です！」

その言葉が終わるか終わらないかのタイミングで桜の精霊の体を巨大な剣が貫いた。その無骨な形状は山で狩りをする猟師が扱う山刀。だがその大きさは人間が持つには明らかに大きすぎる。

「気に入らねえな」

桜の精霊の体に突き刺ささつた山刀を握る者の舌打ちが居間に響き渡る。

「精霊つてのは斬つても突いても手応えがねえ。普段なら相手する気も起きねえもんだが……」

居間の明かりに照らされるその姿に義人は息を?んだ。

「俺たちの『敵』を匿うというなら容赦はしねえ。それを承知でやったのか?花霊組女君『古椿』?」

その姿は自分を襲い、家族を惨殺した妖怪と似ていた。唯一違うの

はツノが生えてないことだけ。

「さて覚悟してもらおうか」

巨大な熊。そう呼ぶしかない外見の妖怪は一言も、悲鳴も上げられずただ硬直している桜の精霊の体に突き刺さる山刀を一気に上に動かした。当然の結果として頭までを山刀が切断し、その断面から鮮血が噴き出す……。それが一瞬で次の瞬間には桜の花びらとなって宙を舞い始めた。

「これだから手応えがない。人モドキの偽善者共め。所詮貴様たちも俺たちと同じ穴の貉なくせに、偉ぶりやがって！」

熊の妖怪の声に応えるかのように屋敷の周りで唸り声が聞こえる。恐らく目の前の妖怪の仲間だろう。

「笑わせないでくれない？ 私たちは『穴』の守護者、境界線の防人よ。あなた達と同格に見られちゃ良い迷惑だわ」

古椿の言葉を熊妖怪は鼻で笑った。

「そういう言葉は力あるものだけが語れるものだ。貴様ら精霊が持つ力は確かに特別だが、それがあるから強いという訳じゃない。むしろ花の精霊であるお前たちには戦闘力が足りないはずだ。人間に無残に踏みつけられても反撃することも一矢報いることもできないのが貴様らだからな！」

「花霊組は確かに戦闘力が弱い。それは認めるわ。では私から質問して良いかしら。なぜ弱いはずの花霊組は今まで生きのこってこれたのでしょうか？」

「なんだと？」

「それはね……………女君である私が強いからよ」

「てめえ！」

そう叫んだ熊妖怪の頭に木槌がめり込むのは一瞬だった。あまりの速さに衝撃音が遅れて聞こえてくるほどだ。

彼女が両手で握る海石榴<sup>ツバキ</sup>の椎が一瞬で熊妖怪の体を真上から叩き潰したのだ。

床に広がる血のシミと肉片が破壊の凄まじさを物語っていた。

刹那、居間の襖を完全に全て吹き飛ばして化け熊達が侵入してきた。

「あなたがどこからきたのかを聞くのは保留にするわ」

こっそり耳打ちされて思わず顔を上げる義人に古椿は小さく微笑んだ。

「まずはあの逆恨み連中を片付けるわ。義人、あなたは適当に逃げて」

「そんな！ 君を囮にして逃げるなんて無理だ！」

「別に囮になるなんて言っていないわ。私は必ずあいつらを倒す。でもあなたが近くにいて、私の力で傷ついたら本末転倒でしょう？だから逃げてって言ってるのよ！」

「なにゴチャゴチャ話してやがんだ！」

そう怒鳴りつつ斬りかかってきた化け熊の1匹をゲームに出てくるホームランバットを使うかの様に木槌で空彼方まで吹き飛ばし、熊たちを牽制する古椿はまだ踏ん切りがつかない様子の義人の首根っこを掴んでそのまま持ち上げたかと思うと素手で居間の壁に穴を開け、そこから勢いよく外に向けて放り投げた。

「!?」何がなんだかわからないまま外に放り投げられた義人の体は屋敷の外に待機していたらしい花の精霊たちの前に転がった。

「あなた達は花霊組？」

義人の当たり前すぎる質問にも花の精霊である彼女たちは、リーダーが招いた客だからか、元来の性質が真面目に頷くのだった。

居間で睨み合う両者の内、仕掛けたのは古椿の方だった。

「針虫の舞い！」

古椿の声が響くと付近の林から、家の中から、どこかからか空を飛んで集まってきた蜂が一斉に化け熊たちに襲いかかる。

「さて味わいなさい。あんた達の言う最弱組カレイクミの最強ジヨクンの実力を」

## 花霊組（後書き）

3作目にして既に作品タイトルのカタカナネタに限界が来ました（涙）

それはともあれ、なかなか進みません。こんかいも話が主体で戦闘はほんの僅かです。今回書きながらかんがえていたことは、自らが本当にこんな状況に陥っていたらなにを考えるだろうかということです。

大気圏突入うんぬんの辺りはそのあたりの発想から生まれたものでございます（笑）

さて、次回は義人を狙う化け熊たちと古椿が激突！そして義人がついに力を！ といったような話にしようかと思っています。ご期待ください！

## 両面宿儺

古椿により屋敷の外に強制的に脱出させられた義人は花霊組の花精霊たちと共に屋敷から遠ざかっていた。

屋敷の方角からは連続した衝撃音が響き地面を揺るがすほどの振動が来ている。古椿が戦っているのだ。

「古椿一人で大丈夫なのか？」

「あの人なら、女君なら大です。それに私たちの中でまともに戦えるのは女君だけですから私たちがいつても足でまといになるだけです」

義人の独り言にまで真面目に返答したのは精霊の1人。着物の柄や色から見てアサガオかなにかと思っていたが聞いてみると「アオギリの精霊」という言葉が返って来て義人は首を傾げたものだ。その名前から花を即座に連想できなかったのだ。

「（それにしても……………）」

義人は自分と共に逃げている30人ほどの精霊たちをぐるりと見渡して呟いた。

「美人ばかりだよ……………精霊って女しかないのかな……………」

「……………」

「別に女だけじゃないですよ。ただ確かに女が多いことは確かです。だから非力な妖怪などと呼ばれるのですけど」

「解説ありがとう。ていづかなんでいち僕の独り言にまで返事するの？」

「分かりません。なんとなくです」

一言で返されて、すこし落ち込む義人だった。

その時、一番前を歩いていた精霊の1人がなにかに警戒したように足を止めた。

「どうしたの？」

「いや、なにか嫌な気配が……」

そう言いかけた先頭の精霊の体が前方の大木の影から突き出された屈強な腕に吹き飛ばされた。

いや、それだけでは言葉が足りない。

なぜなら腕は1本ではなく、4本だったからだ。

「まさか………両面宿儺！」

身構える義人たちの前に、大木の影から姿を表したのは古椿の木槌、<sup>ツバキ</sup>海石榴の椎で吹き飛ばされたはずの妖怪、両面宿儺。その顔に無数の傷をつけ腹に惨い裂傷を負いながらも彼は生きていたのだ。

「あの嬢ちゃんに吹き飛ばされた時は本気で死ぬかと思ったが……  
・どうやら天は俺に味方したらしい。落ちた場所がたまたま木々に

囲まれた池だったおかげで木枝に腹を引きさかれただけですんだ」

「嬉しい話だぜ！ 俺たちを吹き飛ばした女が守ろうとした人間を今、この手で消すことができるなんてな！」

「消す！？」

両面宿儺が放つ斬れ味をもつ言葉に切っ先を喉に突きつけられたことさえもない少年はなにもできない。

だが次の瞬間、義人は目を疑った。消すという言葉に動揺する義人の前に精霊たちが立ったのだ。

「なにをするつもりなんだよ！ 殺されちゃうぞ！」

「分かっています！ そんなこと分かっています！ それでも私たちはこうするんです！」

アオギリの言葉に義人は言葉を無くし、両面宿儺は皮肉めいた笑みを浮かべた。

「なぜだ？ なぜお前たちがそれを守る？ 貴様たち精霊が生き残る為にそいつが必要なわけではないはずだ」

両面宿儺の冷静な方の顔の問いかけに対してアオギリの精霊はなんだそんなことかという表情を見せた。

「私たち精霊は、何かを守って生きてきた。なにかを守る役目が今代では『穴を守護すること』になっているだけで私たちが守るもの

「が穴だけという訳じゃない」

その言葉に他の精霊たちが頷く。彼女たちの心にブレはない。

「私たちを率いる女君の意思は私たちの意思でもある。その女君が守ると決めたのが後ろに立つ少年であるならば私たちは立ち塞がる。それが私たちの信念だから」

「良いねえ！　そういうバカは、そういう弱者は嫌いじゃない！　ならその信念とやらを見せてみな！」

軽薄な方の顔が満面に笑みを浮かべて2本の腕で槍を握る。

「愚かなり精霊族．．．．．決めた信念があろうとも力なき者に果たせることなどなにもない」

冷静な方の顔が2本の手に一つずつ剣を構える。

「「死ね！　花霊組！」」

声を揃えた2つの顔。その声を合図に両面宿儺と精霊たちが激突する。結果は火を見るより明らかだった。

戦う力を持たない。いや、持つのを躊躇う少年の前で力を持たずそれでも戦う者たちが次々と倒れて行く。中には消えていくものもいる。少年の前で次々と舞い上がる花びらが死の輪舞曲<sup>ロンド</sup>を奏でていく。

「やめてよ．．．．．」

ポツリと呟く少年の声は戦場には届かない。

「やめてくれ．．．．．」

味方である精霊たちにも距離的には近いのに届かない。声は聞こえているはずだ、だが今の自分ではその心に届かない。

「（分かってる．．．．．）」

自分の声が届かないのは、自分がこの世界の住人になってしまったことを認めてないから。

「（分かってる．．．．．）」

この世界を落ちた理由がどうであれ今為すべきなのは自分の目の前で殺されていく大切な人を守ろうと動くこと。

「（分かってる！）」

そして一度決断したならリスクや問題を放り出してかけ出すことが必要なのだ。悩むのも苦しむのも取りあえず走り出して始めて与えられるものなのだ。

「全員、そこまでだ！」

突然の義人の叫びに両面宿儺の動きも残存している10名程の精霊の動きもそれら全てが停止した。

「両面宿儺。『俺』はずっとずっと弱者として守られる身になっていた。」

「だったらどうした？」

「もしそうであるなら、俺は戦う！ その精霊たちがそうしてきたような俺もたったいまから信念を抱いて生きる！」

「信念？ なんだというんだ？」

一人称から口調まで変わった義人に戸惑いながらも問いかえす両面宿儺に義人は答える。

「俺の信念は俺に関わり、仲間になった人達の為に戦うこと。俺は、たった今からこの世界で生きる！」

義人の宣言を聞いて両面宿儺の両方の顔は思わず目を丸くした。

「一度我々に殺されそうになった君になにができる？」

「そうだな。俺は非力で誰かに守ってもらわなきゃ生きていけないよ。うな弱い存在かもしれない。それでも、そんな俺でも戦わなきゃいけない時があるんだよ！ 誰かを守るのに資格なんて要らねえんだ！」

義人は走り出す、その手に自分と敵への怒りと覚悟を乗せて。

「戯言を抜かすな！」

正面を向く冷静顔の叫びと共に振り下ろされた2本の刀に対して義人はその両手を振り上げた。

その腕と刀が激突した音は、両面宿儺が予想していたものとはまるで違っていた。

カキーン！ とまるで鉄剣どつしがぶつかつたような音と共に義人の腕は刀を防いでいた。

「（本当は理解していた。俺に力が宿つたことも、こうやってこの世界で生きていくしかないってことも）」

「なんだと？ その腕は．．．．．そうか、あの時も確か貴様．．．．．まさか半妖なのか？」

言われて見れば確かにそうなのかもしれない。元々の世界で人間だったのだ。自分の力が妖怪化したものだとすれば半妖なのもまあ納得ではある。

だが今はそれを論じている場合ではない。

「そんな事を心配してる場合か！」

義人は叫ぶと共に右拳を繰り出した。テレビでみた事がある総合格闘技大会で義人が好きだったとある空手家のパンチを真似て突き出された正拳突きは両面宿儺が防御の為に前で交差させた2本の剣を一撃でへし折り両面宿儺の顔にめり込む。

ばこん！という派手な音と共に両面宿儺の体が顔を殴られただけでも関わらず吹き飛び地面に無残に転がる。

「馬鹿な．．．．．我々両面宿儺が．．．？」

「手前、なにもんだ！」

宿儺の問いに義人はその変化した腕で構えを取りながら告げる。

「俺は妖怪厩戸義人！ 花霊組の奴らをこれ以上いたぶるつもりならこの俺が許さない！」

「舐めるなよ……いったい何の妖かは知らないが……  
・余所者に仁義問われるほど落ちぶれてはいない！」

「俺たちの仁義に水差すんじゃねえ！」

両面宿儺の叫びに、義人は一言で返した。

「だったらその仁義、俺の信義で打ち破って見せる！」

義人は変化した腕を見つめる。その鱗に覆われた右手からは義人の思いに反応したかのように鋭い爪が生えている。

刹那、一気に義人は走り飛んだ。その妖怪としての力を認識し、その力を余す事無く使って両面宿儺も即座に反応できない勢いで義人は動く。

「龍技の式！」誰かから教わったわけではない。自ら名付けた訳でもない。ただ心に溢れるその名を義人は告げる。

「龍爪斬撃！」

その爪から発せられる光が巨大なかぎ爪へと姿を変え両面宿儺に襲いかかる。

「く……？おおおおお！」

反射的にその両手を前に出し防備の構えをとる両面宿儺だが時既に遅し、迫る光の爪を防ぐ術はない。

迫った光の爪は、両面宿儺をバラバラの肉片に変えるはずだった。

だがその光の爪は両面宿儺をバラバラにはしなかった。

バラバラの肉片になったのは、宿儺の背後で今まさに襲いかかろうとしていた中部豪熊会の残党たちだった。

「!!! こいつら.....!!」

驚きの表情を隠さない両面宿儺。

「古椿に敵わなかったから.....僕との戦いで負傷した両面宿儺を狙うとは.....呆れるほどの外道だな中部豪熊会？」

義人の言葉に動揺する生き残りの化け熊たちは義人なら両面宿儺を殺した後には倒せると考えていたようだ。

「逃げられたとでも考えていたの？ あなた達にもはや逃げ場なんてないわ。今あなた達がした事でそれは決定的になった」

その声は椿の少女の声。

義人にとっては大切な仲間の声。

化け熊達にとっては背後に迫る死神の声。

「古椿！」

「その姿があなたの答えなのね義人。良いのね？ この世界で生きる事になっても」

「ああ。古椿．．．．．俺はこの世界にどうしてきたのかは分からない。だがこの世界を生きて、僕がこの世界に来た理由を探したい」

「あなたってそんな風な喋りかただっけ．．．．．まあそれはそうとして、義人がそう決めたなら私が言うことはなにもないわさて、そろそろ戦いを終わらせましょう？」

その手に握る海石榴ツバキの椎を構え直す古椿を恐れ前に逃げようとする化け熊たちだが前にはさきほど仲間をバラバラの肉片にした義人がいる。

進退きわまる状態に陥り動きが止まってしまう化け熊たちに義人と古椿の最後の攻撃が浴びせかけられようとした時だった。

「待ってくれ古椿、義人。お前たちを狙った身で凶々しいのは承知の上だが頼みがある。そいつらは俺に相手させてくれ」

満身創痍の体を起こした両面宿儺がその体を横にして2つの顔を正面に向けて義人に頭を下げた。

「あんたは、自分を殺そうとしあまつさえ戦った敵である私を助けた。私はその恩に報いなければならぬ」

「俺たちやあ、あんたからすればただの愚図妖怪に見えるかもしれねえが、そんな俺たちでもまったくない訳じゃねえんだよ。任侠心てやつが。頼みからやらせてくれねえか」

その言葉に義人は躊躇いもなく頷いた。その行いは妖怪化したからこそのものであったか、本来の彼の内的資質が成したものであったかは分からない。

だがとにかくその時決断は下された。

「ありがたい」

「ありがたい」

両面宿儺の2つの顔はもう一度頭を下げて一礼すると体の向きを変え化け熊たちに正面から向き合う。

「甘くみられたものだな。傷を負っているとは言え我々は宿儺組の長を務めているのだぞ？」

「遊びで組長の看板を背おってんじゃねえってところを見せてやる！」

冷静な宿儺は左手を、軽薄な宿儺は右手をまえに突き出し言葉を唱えた。

「「隠されし物よ、真の主まことにその姿を現せ！」

刹那、2人の宿儺の腕には弓が握られていた。

「あれは破魔弓？　なんであんだ達が？」

驚く古椿には応えず、両面宿儺は空いてるほうの手をそえ、矢を引く動作を行う。その手の動きにそって光の矢が現れる。

「見せてやろう。これが私たち両面宿儺の秘技」

「妖怪である俺たちが手に入れた広域殲滅術」

「「拡散破魔矢！」」

引き絞られ特大の大きさとなった光の矢が2本同時に放たれる。

矢は拡散の名の通り空中で分裂し義人の現実世界で言うクラスター弾のように化け熊たちに降りそそぐ。

化け熊たちの悲鳴は光矢の直撃時の爆発音と閃光にかき消された。

その閃光が消えた時、そこに化け熊たちの姿はなかった。

「こいつは……………」

「驚いたわね……………」

義人と古椿は思わず言葉を出してしまうほど圧倒的されていた。

「なぜだ両面宿儺。なぜ俺たちにその技を使わなかった？」

義人の言葉に2人の宿儺はそろって肩をすくめた。

「1度目は使う間もなく吹き飛ばされ．．．．．」

「2度目は相手の力量を見誤って使わずにいて追い詰められちまつたからな」

「それに、この技はできれば妖怪に使いたくはないのだ」

「なぜだ？これ程強力な技なのに？」

「この技は、本来．．．．いやこの破魔弓は本来、対妖専門の者達の1人である者から譲り受けたものなのだ。陰陽師たちとはまた違う者だったが、そいつを妖怪ながら助けた時に譲り受けたのだ。いつてしまえば妖怪という枠で考えれば我々は同族。我々を滅ぼす為の弓を同族に向けるのは嫌なものなのであまり使いたくはなかったのだ」

「それに、対妖専門の弓を妖怪である俺たちが何の障害もなしに使えるわきゃあねえ。これを使うと代償が必要になんだよ」

言われてみて始めて義人と古椿は2人の宿讎の胸に抉られたような傷ができ、口元から血が垂れていることに気がついた。

「あんだ、それを分かった上であえて使ったの？まさか死を持って贖うつもりだったの？」

古椿の言葉に2人の宿讎は口元を緩めた。

「愚図妖怪にはこれくらいしか借りを返す方法はないのでな」

「それに敵として戦って敗北した相手に助けられるのには耐えられ

ねえんだ……悪いが、死なせてくれ」

傷のダメージが限界に来たのだろう。地面に倒れこむ両面宿儺を見て古椿は木槌を持ったまま軽く跳躍し、そのままに着地する。

「なら望みとおり死なせてあげるわ」

勢いよく振り上げた木槌を振り下ろそうとした古椿だったが、その腕を義人が止めた。

「義人？」

「それはやめて欲しいんだ。それしたら僕は両親を殺した鬼熊っていう奴と同じになってしまう」

口調が元に戻っている義人だが古椿はそれに気づかなかった。

「それは甘いわよ義人。一度助けたから次から狙うのをやめるやつなんてそういないわ。次にこいつらに寝首をかかれることになるかもしれないのよ？」

「そうなったら、そうなただよ。それに考えてみれば非があるのは僕のほうだよ。両面宿儺は縄張りにいきなり現れた僕を敵として認識しただけだ」

「それはヤクザ者の勝手な理屈よ。それにあなたに縄張りがどうかなんて分かる訳ないじゃない！」

「でも結果的にはヤクザ者どうしの禁を破ったことになるんだろ？  
僕は」

「それはそうかもしれないけど……」

「加えて僕は組どうしの抗争を招いてしまった。両面宿儺の行動はそれを止める為だったのだから、おかしくはない。きっかけを作ってしまった僕にも非はあるんだ」

「でも……」

そう言いかけた古椿だが、喉まで出かかった言葉をあえて引つ込めた。

目の前の義人の瞳に宿る意思は本物だったからだ。

「私としては、仲間を殺された私怨があるから本当は一思いに殺してやりたいところだけど……精霊である仲間たちがこいつを倒せば蘇るわけでもないしね。生かすといてあげる」

「ありがとう。古椿。時に両面宿儺。一つお願いしたいことがあるんだけど良いかな？」

「なんだ？」

「鬼熊っていう奴について知っていることを教えてほしいんだ」

「鬼熊……君の両親を殺したという妖怪のことだな？」

「そいつについてはよく知ってるぜ。なにしろあいつが率いていた『中部豪熊会』は俺たち宿儺組の旗下の組織だったからな」

「その鬼熊っていう妖怪はどういう奴だったの？」

「名こそ『鬼』熊だったが、別に鬼の一族ではない。ただ体が馬鹿でかくだいでさえ人間より怪力な熊のさらに数倍の筋力を持ち、2本足で歩き人語を話すのだ。まあ、鬼熊という名は奴自らが名のつた名で我々は単に化け熊大将と呼んでいたがな」

「でも僕の家族を殺した鬼熊には2本のツノが生えていたけどな？」

「そりゃあ、ありえないぜ？ あいつの鬼は自称で奴はあくまでも化け熊にすぎないはず」

「それに、鬼熊は最初はツノを小さくした上で多分人間に化けていた。僕は両親が殺されている場面しか見てないから分からないけど、僕が見た時には少なくとも顔以外は違和感なく人間だった」

「それもあり得ない話だ。鬼熊は力だけが取り柄の妖怪でそういう技は使えなかったはずだ」

「じゃあ、なんで？」

「考えられるとすれば京でなにかがあったのかもしれない」

「京．．．．．京都か．．．．．そういえば確か、鬼熊は京都に行っただと言っていたっけ」

「そうだ。奴はもう何年も前にこの飛騨から逃げ出し京に向かった。力を欲してな。京の妖の間に広まっている生肝信仰とやらに惹かれ

「たらしい」

「京に向かって以来消息が途絶えたんで俺たちやあ、とつくに京の妖どもに殺られたものだと思ってたもんだから、手前が襲われたと聞いて意外に思ったもんだ。俺たちはつきり奴が被りもん被った程度の変装でお前の親を騙したのかと思って馬鹿にしちまったが．．．まさかそんな高度な技を身につけていたとはな」

そう言われて始めて、ここが飛騨という土地だと気づいた義人だが、具体的に義人の時代でいう何処の県辺りなのかが分からない。義人は地理が得意なわけではないのだ。

「そうか．．．つまり鬼熊に何があつたかを探るには京に行くしかないって訳だね？」

「確かにそうなるが．．．まさか行くつもりなのか？」

「そりゃあ無茶だぜ？ 確かに手前に大物の素質があることは認めるが京はそう簡単に素人が入れる場所じゃねえ。ただでさえ今の京は関東の奴良組を始め各地の妖怪、妖たちが覇を競いあつてる激戦区だ。命を落とすのがオチだぞ！」

まあそれもそうだろうと義人は作品世界の歴史を思い返してみている。両面宿儺の話から考えて今は戦国時代後期、作品世界の歴史でその時期の京都を支配していたのは転生妖怪、羽衣狐。あのぬらりひょんでさえ苦戦した程の強力な妖である。

そんな強力な妖がいる京都に出向くのは確かに自殺行為ではある。だがそれでも行かねばならぬと義人は考えていた。行かねば秘密が

分からない。それにもし今が戦国時代後期のあの時期なのだとしたら、恐らく羽衣狐はぬらりひよんに倒される。それならむしろ行ってぬらりひよんの戦いぶりを見ておきたいと思ってしまう。それは言ってみれば心の何処かでまだこの世界を仮想現実と捉えていたからかもしれない。

「私も同感よ義人。もしあなたが京に行くというのなら私はあなたの味方であることを辞める。妖怪世界への新入りのあなたが1人で生きていけると思う？それでもまだ行こうと行こうというのなら……」

古椿はその得物、海石榴ツバキの椎を軽く肩に担ぐ。

「私を倒して行きなさい。私すら倒せないようなら京にいても野垂れ死にするだけよ」

古椿の言葉に義人は黙り込んだ。今の自分の力が妖怪にダメージを与えることができるのは両面宿儺との戦いで理解できた。

だが取り上えずダメージを与えられるのと倒せるというのは大きな違いだ。そして結果的に今現在義人はただの1人も敵を倒せてはいない。

さらに義人は原因不明の妖怪化が可能だがその理屈を理解できていない。どうやったら力を使えるかが分からないのだ。

「それは……古椿と戦ってこと？」

「あなたが京に行くという主張を辞めないかぎりだね」

「もし僕が勝てば、京に行くのを止めないんだね？」

「あんたが私に勝てたらね？」

そう言つて木槌を地面にドンと突き立てる古椿に義人は一瞬躊躇したが直ぐに言葉を返した。

「分かった。じゃあ戦う」

「あんたつて本当に変わつてるわね……まあ良いわ。実力の差を見せてあげるわ。ねえ、両面宿儺。あなた達の修練場の1つを貸してくれない？できれば一番古いやつを」

「修練場はいくつもあるから構わないが……本当に良いのか？ 下手をすればせっかく貴様の意思で助けた命を消すことになりかねんぞ？」

「私は穴の守護者、境界線の防人……もし義人が私との戦いくらいで死ぬような存在なら彼を助けた私の直感が鈍っていたというだけのことよ」

古椿は義人を見つめ、義人を古椿を見つめた。

「義人、あなたは自分から進んで修羅場に飛び込むことを選んだ。覚悟はできてるわね？」

「うん……いや、覚悟はしてるけど正直脆くて直ぐに崩れそうな気もする。でもそれでも僕はやるよ」

「そう……なら行くわよ」

古椿は義人と距離が離れているにも関わらずその木槌を横薙ぎに構えた。

「目を瞑って！」

その声に思わず目を瞑った義人に向けて古椿は遠慮なく木槌を振る。

「花木槌・豪風！」

その木槌により巻き起こされた強力な旋風により直接攻撃を加えられた訳でもないのに義人の体は山の向こう側に吹き飛ばされて行く。

あっという間に山の向こうに見えなくなった義人を見て両面宿儺はぼそりと呟いた。

「飛ばす場所をしっかりと把握しとるんだろうな？」

「というか手前よ。あんた、俺たちの時もあの風を使えば良かったじゃねえか？　なんで直接木槌で吹き飛ばした？」

「うーん……」

と暫く考えて出た古椿の答えは

「飛ぶ場所については半分記憶で半分勘。あんた達を飛ばした時に木槌を使ったのは……半分は気分のせいで半分は殺意のせいよ」

「そ、そうか（怖いなこの女）」

「なるほど気分ね……………」（こいつ気分で殺そうとしたんかい……………）」

と、言葉を返しながら若干引いている両面宿儺に古椿は右手を差し出した。

その意味を理解しかねる両面宿儺に古椿はいかにも面倒臭そうな表情で告げた。

「あなたの修練場であるあなた自身の立ち会いがないまま勝手に戦うのは駄目でしょ？ 私があなたを運ぶわ？ それとも、また木槌で飛ばそうか？」

もちろん両面宿儺が運んでもらうことを選択したのは言うまでもない。

## 両面宿儺（後書き）

今回で両面宿儺とは2度目の対決となります。宿儺って2つの体が合体してますから2人分の会話が必要で大変です。

さて、今回の話で義人は羽衣狐をトップとする京妖怪の本拠地、京都に行きたいという希望を持ちます。

もし本当に作品世界に行けたら、やっぱりキャラの活躍をこの目で見たくはありませんか？ 少なくとも僕はそうです（笑）

だが本場妖怪である古椿はそれを当然認めず、行きたいなら戦って勝ってみると宣言します。彼女のいうことは至極当たり前なんですけどね……………

つか、この2人戦ってどちらが勝つか？と問われたら……………  
まあ、

その辺りについては次回をお楽しみに（笑）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7706v/>

---

時空を超えて～ぬら孫世界奮闘記～

2011年10月7日01時57分発行